

2022年10月10日(月)

老球の細道694号

ミニ、ジュニア世代の育て方

会津バスケットボール協会 室井 富仁

朝日新聞の社説に『日米の好記録 長い目で育成の先に』が掲載されていた。日本のプロ野球と米国野球大リーグでの若手日本人選手の大活躍の話である。

【〈前略〉開幕早々、ロッテの佐々木朗希投手が打者すべてをうちとる完全試合を達成した。ヤクルトの村上宗隆選手は最終戦で、王貞治さんを超えるシーズン56本の本塁打を放った〈中略〉大リーグに目を向ければ、大谷翔平選手がベーブ・ルース以来の「2ケタ勝利、2ケタ本塁打」を達成したのに続き、投手と打者がそれぞれ1年を通じて活躍したことを示す規定投球回数、規定打席数をクリアした。過去120年度余りの歴史で誰もいない。数字が示す「二刀流」の難しさの証である】

スポーツが大新聞の社説で批判されることはよくあるが、絶賛されることは非常に珍しいことである。それだけ野球界の偉業が世の中を感動させたということだろう。翻ってバスケットボール界はどうだろう。東京五輪後、線香花火で終わってしまったのか。

そしてさらに社説では、このような稀代まれな大選手を輩出するのは指導者が原因であると説く。

【こうした凶抜けた選手が高い力を持続的に発揮する背景に通底しているのは、10代で受けた指導ぶりだ。無理に「型」にはめようとせず、目先の結果に一喜一憂しない。選手としてのピークをイメージした長期的な視野に立った指導だ】

先週会津地区においてはミニバスケットボールのジュニア大会(5年生以下)と高校生のリーグ戦が開催されていた。ミニバスケットボールは5年生以下といえども、多くの子ども達が参加し、将来性のある子どもたちがたくさんいた。ところが、高校のリーグ戦では、5人そろえるのがやっとだというチームがかなりあった。ミニでバスケットをスタートした子どもたちが中学、高校と進むうちにどれだけリタイアしてしまうのだろう、どれだけ優秀な存在が姿を消してしまっているのだろうか。

バスケットボール大好き人間を育て、年齢が経るごとに大輪の花を咲かせる人材を育てるには保護者、指導者大人達のミニ、ジュニア期に対する関わり方が重要である。

世界はお隣の国の核使用に不安を抱かされているが、わが国には「非核3原則」がある。「核を持たない、使わない、持ち込ませない」。保護者の子どもの教育にも「比較3原則」がある。漫画家のみうらじゅん氏が唱えているが、10代のバスケットボールの子どもたちにも応用できる。①他人と比較しない②家族と比較しない③過去と比較しない。

指導者は勝ち負けだけにこだわらず「4つのお願い」を常に選手たちにフィードバックしてほしい。①もっともっと好きになる②基本を大切にする③色々な運動を経験する④家庭生活、学校生活がすべての基本。

そして最後に、天狗にさせない、ケガさせない、止めさせない。子どもは大人しだい。